新鐫
京傳戯作
通油町鳥屋板
上
中
下

序

に出まするは
市川團十郎でございい

歌「雨の降る夜はナァ。一しほゆかし「何といはつせえます。草册紙の趣向に。夢が古いといはつしやるのか。こりやァこな様のが尤もぢや。したが、古きを溫ねて新しく書かゆるが卽ち趣向の新しきといふもの。古いといはつしやるこな様が夢か。新しいといふわしが夢か。浮世が夢か。夢が浮世か。嗚呼莊子じやナァ チヤンチヤンと爾云。

嘉き夢見んと臥す亥の床

正月二日の夜

山東京傳述

序

よ出ます、市川の團十郎でございい

のふる歌ハけア。えとしゆゆ〜しく〜なんと
いふ世〜ます。業冊録の出るうに。ゆめがふひ
と云ふ出るのう。まいう出ごろれ。出るのうりつもよや
出くがふる紀と平まび絵で。ひ〜く書うゆうがすかち
出るうれ。あ〜〜きしいすりの。ふひといふ川しゆ
あるさ夏ぐ夢う。あ〜〜しひといふふしが夢ぐ
うき世が変う。梦ぐうき世う。峠荘ふしやナア
チヤンチヤント爾云

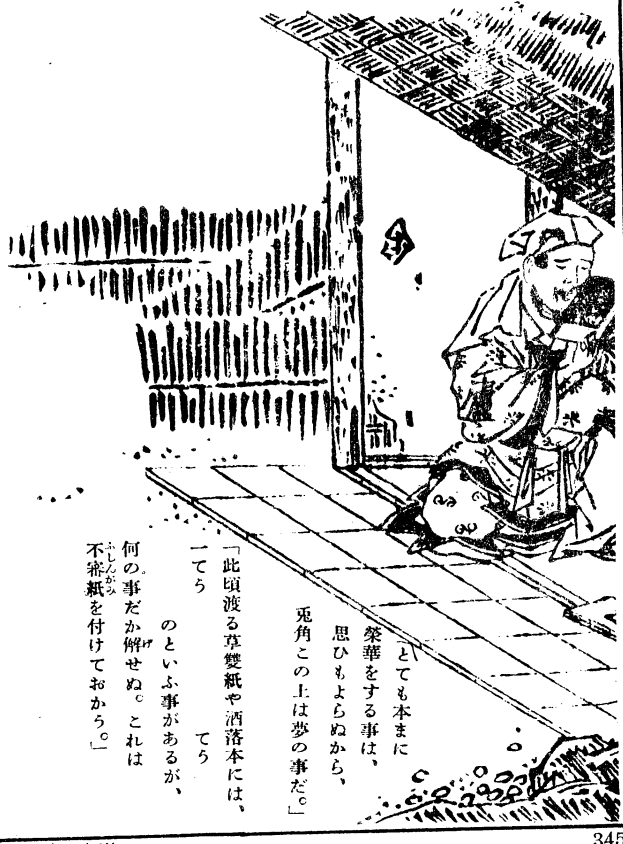
よ紀ゆえうんと
ゆき変の庶
正月二日の歌

山東京傳述

昔唐土、蜀の國の傍に廬生といふ者ありしが、身貧しくして、心の欲する所に任せず、女郎を買ひたいには金がなし、地色をしたいには、男が惡し、甘い物食ひたいにも錢が無く、何も樂しみが無き故に、常々日本より新渡の草雙紙を求め、これを讀んで氣を晴し暮しけるが、先年出版したる草雙紙、金々先生榮華夢、見徳一炊夢なぞいふ本を

「金々先生が夢も。蘆屋清太郎が夢も、さて〳〵面白い。全體。日本は夢の多い所かして、草雙紙の趣向は、兎角夢がたび〳〵だ。

見て、せめてこの本のやうに、夢にでも榮華を極めたきものと、果敢き事を望み、これより片時も起きて居る事を費と定めて、榮華の夢を見んことをのみ、待ちて暮しける。



「とても本まに榮華をする事は、思ひもよらぬから、兎角この上は夢の事だ。」

「此頃渡る草雙紙や洒落本には、一てう　てう　のといふ事があるが、何の事だか解せぬ。これは不審紙を付けておかう。」

一　京の夢大阪の夢
一式道具
一　地獄極樂の夢
一式道具
一　富見德の夢
一式道具
一　和漢吉凶の夢
一式道具
一　佛神御夢枕の藥等
御請負ひ仕候

爰に又天上と人間界との中二階に、夢茶羅國といふ世界あり。此國には多くの夢住みて、色々樣々の夢を案じて、人間に見せる事を商賣とするなり。此國のお頭を夢魂道人と申し奉る。それ、

「此頃は、人間界の日本なぞは學問が流行つて君子が多いといふから、もちつとへ閑になりさうなもんだ通人に錢なし、君子に夢なしといふから。」

「兎角安上げの夢を案じようと思ふから骨が折れる。」

夢の形といふものは、どうしたもんだといふに、男かと思へば女の如く、若いかと思へば白髪も生え、唐人かと思へば日本人の如く、何處といつて、つかまへ所のなき者なり。夜はいふに及ばず、晝寢にもちよびとした夢を見せねばならぬ故、夢ほど忙しき者はなく、夢魂道人、案じに頭をわらす。なか〳〵茶番を案ずる位の事ではなし。

毎日々々

定

惣夢道具人形衣裳入れ候藏の内へ無用の者かたく入るべからず

月　日

「此作者も夢の衣裝付には大分手古摺つたさうにござります。」

夢魂道人は、色々様々の夢を案じて、下細工の夢手合に申しつけ、夢の道具や人形を拵へさせる。

その忙しさ、さも祭前の茅町の如し。

「どの松は、屋敷の丁固とやら、てれめんていとやらが腹の上へ生えさせる夢だげな。何とひやうひやくな夢ぢやあねえか。した所、懐浪とやらが讀んだ奴でなければ、こいつは分るまいといはしつた。」

「この二筋の矢は、源頼光に夢中に授ける水破兵破とやら、曲馬評判とやらいふ矢だとさ。」

「荘子に見せる蝶々の夢は、手前へ拵へるまでもないといつて、蝶々寅の手前から、そりや止まつたといふ奴を買つて用ゐる。」

「寐小便を垂れる時の夢は、人形の尻の穴へ水鐵砲を仕掛けるなり。かるが故に、小便をする夢を見る時といふと、得て漏つて出兼るものなり。これは水鐵砲の工合の悪い時と知るべし。また、寐糞を垂れる時の夢も同じ事なり。竹の筒へ糠味噌を詰めて突出す。矢張心太の理か。

「此頃聞けば、神田邊のさる學者が自ら孔子の氣取で、我は未だ夢にだも周公を見ずなどゝ高くとまつて居るさうだ。こいつに周公旦の夢を見せて、膽をつぶさせようと思ふ。また吉原のさる女郎が、いつそ惚れて居る色男に會ひたがつて、せめて夢にでも見てえと古歌の通り

いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞ寢る

と、昨夜も床着を裏返しに着て寢たさうだ。可哀相に。これにも色男の夢を見せてやらう。」

「さやうなら、この二色の道具立にかゝりませう。」

程なく道具出來上り、かの儒者と女郎の所へ夢を見せに見く。何の事はない、竹田の邸行といふものなり。

この搾いで行く菜蝶の尻子玉のやうな物が、夢の道具第一の物なり。上の夢の時は針金にて拵へ、白練の切にて張り、又は絹綿を薄く張る。下の夢の時は、竹で曲げ吉野紙で張るなり。

また夢の形は、結んだやうな物故歌にも夢を結ぶと詠み來れり。

夢手合は、あんまり早呑込をして、道具の合印を間違へ、女郎に周公旦の夢を見せ、學者に色男の夢を見せる。按ずるに心にもなく、根ツから葉ッから思ひもつかぬ飛んだ夢を見る事あるものなり。それは、みんな此のやうに夢手合の間違へた時の夢と見えたり。

「おれは唐土文王の子、武王の弟で大聖人といはれたもんだ。」

「モシイお爺さんへ、主の表德は周公旦と申しんすかえ、錬藥のやうな名でおざんすねえ。」

「何といひなんす。主は貧乏の子、「無精者」の弟ッ大變人だとかえ。」

「女郎唐人を夢に見せられ、大の不承知也。」

ヒウ、引ドロン〜〜〜〜〜〜

學者は色男と廓を駈落して、中田圃で心中と出かける夢を見る。これらはからつきり思ひもつかぬ夢なり。夢判じに判じさせても分るまい。作者にも分らぬ。

浄瑠璃

「何時ぞや史記の素讀の夜、お醫者さん方學者衆、多くの中でこなさんの此末あまりこじつけなれば略す。

「おれはそもじのその口臭の難むしや〳〵といふ爺むさい所に惚れた。何と茶人であらう。それだから薄物も茶微塵だ。」

「女郎と儒者とぬたにしたやうな嫌味をいふ。

「足下に任ンした不候が身を、そんなに疑ひなんすなら、寧ろこの割つて見せたらヲス。」

「愚按ずるにわつちより、主の心意氣が未だ詳らかならずでヲスよ。」

此内手あきで居た夢、
何の所詮もなく、
彼の學者の家の飯炊に
金を拾ふ夢を見せる。

「おわが身は、白痴が
釣をするやうだ。」

「どうでついでだから、われにも
まけに氣の揉める夢を見せて
やらう。それ嬉しいか〳〵、
うんつく奴、夢とは知らず、
無性に嬉しがるやつさ、
此處までござれ、甘酒進上、
獅子の洞入、洞返り、
三介待つたり〳〵。」

「こいつはなか〳〵
おもしれえ。」

「これは金ぢやさうな
嬉しや〳〵何でも
運の開きめだ。」

「さて〳〵此金は
變つた金だ。
無性に宙を飛ぶ
金玉か金玉
か知らん。
アヽ、ぢれつてえ、
どうも捉らねえ。」
と獨言をいひ
〳〵
終ひには、
これ込み、
思へば此かね恨めしや
とて、兩方の手を
かけ、とるよと
見えしが、うぬが
睾丸をしつかり握り、
冷汗を流して目が覺める。

夢魂道人夢手合をきめる。

「手前達はマア、女郎に周公旦の夢を見せ、學者に色男の夢を見せるといふやうな、氣の利かねえ事があるものか。夢を商賣にして居るやうでもねえ。ちつと身にしみたがいゝ。」

「コレ、わしがのはみんな小豆でわるい。

「夢人足手合の辨當には、牡丹餅を拵へて持たせて出すなり。かるが故に、夢に牡丹餅といふ事はじまつたり。

なんと先生、

は、その黄粉と取換へてくれる氣ねえかべんとうはどうだ、エヽ。」

周禮の春官に曰く、日月星晨を以て六夢の吉凶を占ふと。所謂六夢は一に正夢、二に噩夢、三に思夢、四に寤夢、五に喜夢、六に懼夢、これなり。その外數多き夢の内に、遺精の夢を禁ずるなり。これは俗にいふ妄想の事なり。此類の淫がましき夢を見する奴は、死罪になり。然れども、夢といふ行ふ刃物で切つても切れぬ者故、奴が貘といふ獣を飼つて置き、さやうの罪人は、これに喰はせて制當するなり。これを思へば、貘は夢を食ふ事違ひなし。吉原で、ばくらしうありんすといふもこれより出たる言葉なり。

獏曰く
「科人の懐に二朱銀が二つ三つあるさうだ。出してくんなせえ。商が堪らねえ。」
「風吹きには火の用心の悪い獣だぞ。」
獏は一散に、馳け出し、忽ち夢を喰ふ。
「獏に食はれるとは、あんまり智慧がねえ、ア、ゆめえましい。」
「夢になれ〳〵といふ場だが、こつちが夢だから據無く人になれ〳〵。」

正月二日の夜は、初夢というて、夢の世界の大物日なり。寶船を敷いて寢た程の者には、それ相應の夢を見せてやらねばならず、一富士、二鷹、三茄子はお仕着通り、春の初の春駒なんぞはいふに及ばず、富の見德には呉服屋の番傘、人に斬らるゝ夢は逆夢

「ちよん〳〵〳〵〳〵」「とひよ〳〵〳〵〳〵」

「此夢などは賣買にしても値打のある夢だ。一日たつてから話せばいゝか。」

たゞし、一富士、二鷹三茄子の道具も、さうさうは間に合はぬ故、一筑波、二蔦、三唐茄子などゝいふ牽强の夢もあり。

こいらを見る者は、氣の揉める穿鑿なり。

「鷹を遣ふは、とひよ〳〵といふから、張合があるが、茄子を遣ふは默つて居るから張合がない。

というて、身に金の入る事あり。色々様々の夢を仕組んで、幾組も〳〵出るその忙しさ、年越の晩の大神樂、松の内の大黒舞の如くなり。中には三人詰、四人詰、もやひの夢もあるなり。

「ろく〳〵夢を見とゞけもせぬに拍子木を打ち、隣へ曳いて行く。祭の所望の如し。それだから、初夢は空覺えなものなり。

夢魂道人芝居下の夢を呼び集め申し渡す。

「此度唐土蜀の國の傍に住む廬生といふ者が、榮華の夢を見たがる故、見せてやらずばなるまい。然し、これは悟の夢だから、一通りでは行かぬ。五十年ばかりの事を、取組まねばならぬ。今度は人形では間尺に合はぬから、歌舞伎にする積りだ。みんな役をとつて稽古にかゝつたがいゝ。」

「深川の夜具包のやうに夢に札をつけて置く。

「廿日餘りに四十兩の上を行き一晩に五十年と來ては、道具衣裳によつぼどかゝる。よい金主をつけずば、此夢はたまけいい。」

「それは大騒の不動でござります。」

抑も廬生が夢の狂言の筋といづば、邯鄲の謠にある通り、楚國の使玉の輿をもつて迎ひに來り、帝の位を廬生に讓り、庭には金銀の砂を並べ、東には三十四丈に白金の山を築かせて黄金の日輪を出し、西には黄金の山を築かせて、白金の日輪を出し、天の濃漿を沉瀣の盃で飲ませ、女官のかしづき、四季の景色を一時に見せるなど、今時の廬生、そんな野暮な事では榮耀とも榮華とも思ふまじと、夢魂道人これを新狂言に書換へ、楚國の使を北國の使にして、吉原の榮華を見せるつもりなり。

程なく道具建衣裝等も出來、稽古も固りければ、まづ夢の惣浚ひをする。

「夢の正面二三尺の間黑幕にて松の立木あり。うすどろにて幕が開くと、夢の若衆大勢四手駕籠を舁いで出で來り、いろ〳〵捨臺辭思入あつて、とゞ廬生得心して駕籠に乘る。若衆乘物やれといふをきつかけに

「みんながなか〳〵器用でござります。」

「相撲の行司と廬生は、團扇が看板だ。」

「夢の内の立物、廬生の役をつとめる。廬生膳をつぶす思入れ、いろ〳〵仕打あり。

「如何に申すべき事の候。楚國の使にあらぬ北國の文使これまで參りたり。是非をば如何で計るべき。御身

「夢魂道人大帳を控へて、忘れた臺辭をつけてやる。

「みんなとちらやうにしやれ。」

行列三重になり、何處ともなく消え失せると後の黑幕ばつたりと落ち、下座背搔通り神樂になほして、夢の正面、廓の道具に變る。

色男の御瑞相こそまします。

通子屋の稻鶴さんと申す花魁、御身を見ぬ戀に憧れ給ふにより、御迎ひのためこれまで參りたり。早々四手に召さるべし。

道具變れば、實にも妙なる花の廓、金銀の砂子を撒いたる唐紙を押開き、名ある色達立出て廬生にしなだれかゝると、後は荻江流の唄になる。廬生は五文も痛ますして、かゝる樂しみをする事、日頃の望みに百倍したる心地する。

「此處、差詰東の方には三十四丈に黃金の日輪を出し、西の方には三十四丈に白金の月輪を出す場なれど、所をぐつと酒落て、東の方よりは

「廬生さん
ようお出なんした。」

「夢魂道人
思はずほめる。

イヤ
おらがのやんや〳〵、早くこの夢を見せたい。ほんの廬生が見たら、さぞ驚しがるだらう。

三十四五になる
黄金を欲しがる
ばち鬘の幇間を
出されたり。
又西の方よりは
三十四兩に賣られた禿が
白金の七輪で煮た
煮花を出されたり。

「ナントうまからう
おれも
食ひたい」

「又天の濃漿さ
沅瀣の盃
たんと上れ。」

とやらで
飲ませるも
面白からずと、
鯛の味噌吸を
花魁の箸で
食はせる。

「モシ旦那へ
どうで
ごぜえ
すと」

夢の幇間だけ
酒落も緑味なり。

「蓬生現を
千八百本程
ぬかす所
大でけ〜。」

その次の幕は、仲の町八月の景色、夜かと思へば、夜見世のあかり、この里ばかり晝のごとく、禿がさしたる櫻の花かんざしを見て春かと思へば、幇間は絽の羽織を着て夏の如く、菊を植ゑて秋かと思へば八朔の白無垢揃ひは雪の降りたる如く、

四季折々は
目の前にて、
夜晝となき
樂しみの榮耀にも
榮華にも
げにこの
上やある
べき。

夢魂

道人曰く「これほどにみんなが骨を折るが、肝腎の虚生奴が寢がへりをして、此夢を忘れねばいよいよが。」

盧生思はず吉原に流連して、つひに五十年目の大晦日となり、猫が棚からばつたりと擂鉢を落した音に驚き起きあがり、傍にありあふ鏡をとつて見れば白髪の姿となる。これはどうだと臍が宙がへりをして今まで一緒に寝て居た通子屋の稲鶴を引起して聞けば、こはいかに、早々苦界十年を五度代つて五代目の稲鶴なりと聞き、さては五十年の夢に

違ひなしと、又候
膽がでんぐりかへる
ところへ禿大勢たち出、
「ナント廬生さん、
迷のお眼が今醒めんした
かえ。」といふをきつかけに、
座頭夢魂道人立出で、
まづ此夢はこれぎり
ドン〳〵〳〵〳〵とうち出し
さて惣淩の出來も
すつぱりうまくいつた故、
夢共みな〳〵手打して喜び、
いよ〳〵明晩見せべしとて、
明日の夜を待ち居たりけり。

これより
廬生が
夢はじまり、
そのための
口上
左様。
チョン
〳〵
ヒウ
ドロン
〳〵
〳〵
〳〵
程なく明日の晩となれば、
夢共早く狂言をしたがり、
ほんの廬生が、まだ
ろく〳〵寝つきも
せぬうちから
幕をあける。
ヲヽ、それ〳〵。
何かに取り紛れて
忘れて居た。
モシエ、つかねえ
とつたが、
めでたし〳〵
〳〵〳〵〳〵。
京傳作
四
第